

茶園の土壌診断

—マグポロン施用の効果—

四日市市農業協同組合指導課
園芸係主任

稲 場 幸 好

茶どころ静岡について、生産県である三重県の茶“伊勢茶”の主産地は、ほとんど四日市にある。600 ha の土を昨年の8月から、1 ha に1点の割りで調査しようと、四日市市役所農林課、四日市茶業連合会、四日市農協が協力して、当農協管内の水沢、小山田、川島、桜地区の茶園の土を昨年は218点、ことしは182点を診断した。

当初の計画では、2カ年にわたって調査し、この結果によって、茶園の土を改良して茶の生産性を高めることを目的にした。

茶樹は酸性の所で生育し、酸性に対しては強い作物であるといわれ、農家もそう信じていた。したがって酸性の強い土壌が多く、pH3以下の土も診断の結果出ている。

茶は肥料が多いほど味が“のる”といって、多投がつけられていたが、かねてから農業試験場でいわれているpH5~5.5の所には“石灰150Kgは施しましょう”といわれながらも、その効果が判明せず、施している農家が少なかったといえる

昨年からの診断をご指導いただいた全購連名古屋支所の鈴木孝平氏と、診断に協力された各肥料メーカーの技術陣を動員し、ことしは、三重県経済連の園芸相談車の診断班に全面的に調べてもらった。それはpH、アンモニア態チツソ、硝酸態チツソ、有効リン酸、石灰、苦土、マンガン、アルミナ、リン酸吸収力、石灰施用量などである。

茶の栽培は葉を収穫するというところで、窒素質肥料単用という注文をする農家が多いのが現状。

それが硫酸根を含むものであるか否に

かわらず、傾斜地での栽培が多いことも併せて、肥料成分の流亡と酸性化が急速に進む傾向にある。

当農協で昭和41年春、20農協の合併と同時に開催した茶栽培座談会に、当時の旭化成名古屋支店のメンバーが雪が一尺もつる水沢地方でガタガタふるえながら、火鉢をかかえて農家と話合ったのを思い出すと感謝に耐えないものがある。

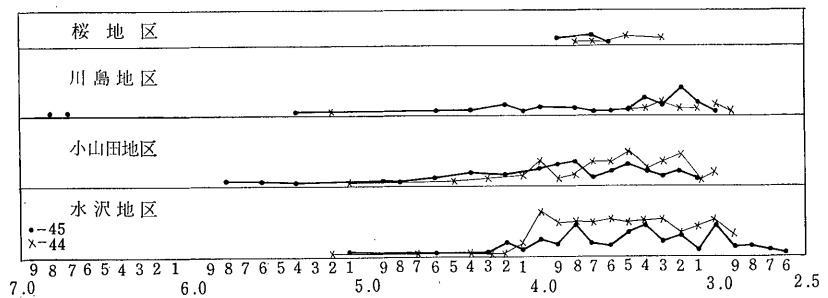
茶栽培地帯の農協が合併以前は不振農協であり、座談会に農家を動員はしたものの、肥料の推進まで一挙に成果があがらなかったことに、私としては、営農指導のむずかしさをしみじみと味わったものである。

ひどい時には酔眠もうろうとした農家から、「お前なんか茶のことは知るものか、おれの畑はおれが知っている。農協のコヤンなんか買ってきてやるものか」と、罵声をあびせられたが、くやし涙をこらえながら、いつかはきっとこの人達を我が手におさめ、現状を打破し、栽培改善に結びつけるものはないものかと考えていた。

こうした苦勞をかみしめながら、市が計画した茶園土壌診断事業を、時あたかも経済連がうち出した園芸診断とうまく結びつけて、農家に茶園の土を持ってこさせた。(土は表層から10cm下を原則とした。) 根群のよく働が見られるのは表土ではなく、中層土から下層土である。俗にいう「ヘソ下三寸に何とかをねらう」わけではないが、根の働く土を改良しないことには、何にもならないからである。

pHもこうして見ると、4地区とも調査点数の差こそあれ、3~4という園が多いことがわかる。4~5~6のところへと、数値が少ないながらも移動している。

図1 pH (K cI) の各地の変化



アンモニアは肥料の施用時期によって、フレが生ずるのがわかるが、ことは調査時期が6月、昨年は7月末と約1カ月の違いがあることは、診断班の日程からやむをえない。が、それにしても0~1の園がなくなってしまったことは大きな変化である。

水沢地区は黒ボクが多く、小山田、川島では粘質土や黄色の砂質土が多いが、この数字の動きが水沢と小山田、川島とは違っている。

このことは、使った改良資材によってはっきりとわかれたことがいえる。水沢では、マグカルが多く使われた。小山田、川島ではマグポロンの方が多く使われたことが、出荷状況から判断できるのである。

これは三要素の入った肥料を施すように、座談会で強く説明したことも大きい。が、土壌改良資材の投入によって、リン酸の吸収されやすい土に変わったといえる。

カリは欠乏した園が大きく減り、良好の園に変っているが、小山田地区の動きがやや他の地区とは違った動きをしているのは、座談会での動員力も少なく、土壌改良の説明がよく浸透しなかったとも反省できるが、石灰をよく攪拌せず、表層にふりっぱなしの園が多かったことである。石灰は「欠乏」、「要注意」の園がなくなり、「やや不足」、「良好」といったところへ変わった。

(この項続く)

図2 アンモニア態チッソの変化

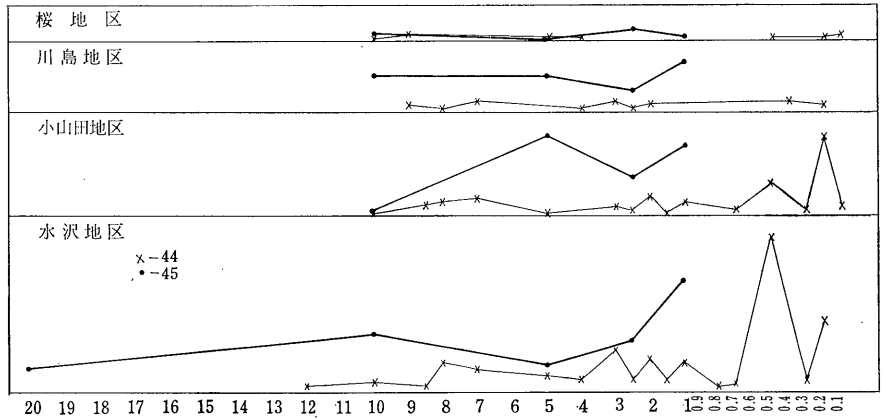
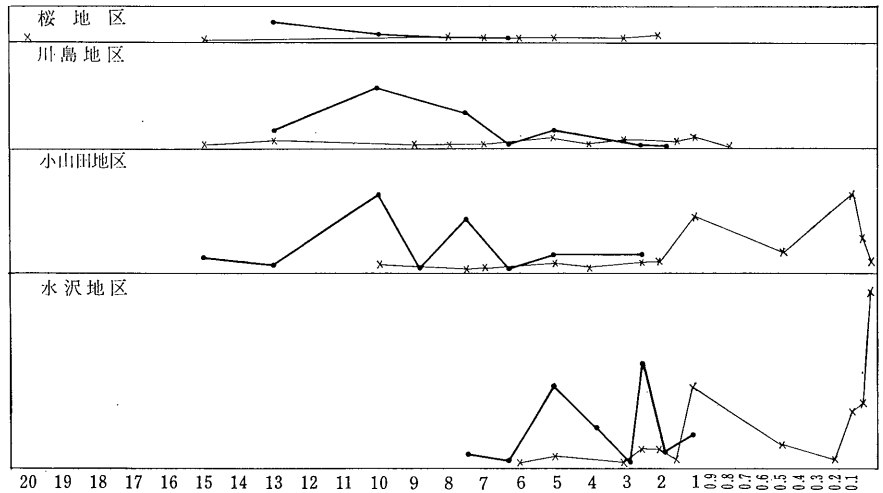


図3 有効リン酸 (P₂O₅ mg/100 g Soil)



高度改良資材 “マグポロン”

“マグポロン”は、直接海水と石灰を化学反応させて精製される塩基性苦土肥料で、含有成分は別表のとおり、苦土のほか、ほう素などの微量元素の効果もあり、70%のアルカリ分があるので酸度矯正に十分な効果を発揮します。

“マグポロン”は、特殊な製法で製造するので固結せず、長く保存しても肥効が変らないのが特長で

×溶性	アルカリ分	×溶性	×溶性
30%	70%	15%	0.2%

微粉末なので効き目が早く、地中深く浸透するので、野菜、果物、牧草、水稲、麦などあらゆる農作物の栽培に欠かせない改良資材です。“マグポロン”について詳しく識りたい方は、チッソ旭肥料(株)あてご照会下さい。